

中央大学保健体育研究所公開講演会 (2)

日 時：2021年12月11日(土) 15:00~16:30

開催方法：オンライン開催 (Zoom)

講 師：岸 卓 巨 氏

テ ー マ：スポーツの力で誰一人残さない
「スポーツ×SDGs」の現在

○岸さん A-GOALプロジェクトの岸と申します。よろしくお願いたします。今日は4時半ぐらいまでのスケジュールになっていますが、早めに終わって、個別に質問もあれば受けていきたいなと思っています。先ほど小林先生からあったように、今日はケニアとも中継を繋いで話をしていきます。

改めまして、一般社団法人A-GOAL代表理事の岸と申します。よろしくお願いたします。今日の目次としては、「アフリカスポーツとの出会い」と言ったところからお話しさせていただきます。ケニア現地と繋いで、最後にまとめという流れでいきたいと思います。是非質問など、コメントとかチャットの方に送っていただければと思います。どんな些細なことでも結構ですし、話の本筋から離れるような内容でも構いませんので、どんどんコメントいただければと思います。

では、「アフリカスポーツとの出会い」というところでお話をさせていただきますが、初めに自己紹介をいたします。私自身、中央大学の法学部国際企業関係法学科を卒業しました。大学時代からFLPにお世話になっていまして、小林先生のゼミでスポーツを通した地域活性化などを研究していました。

一旦、民間企業に勤めたのですが、その後改めて中央大学に入り直して、大学院でスポーツを通した国際協力について研究をしていたというところになります。

大学院中に休学をして、JICA海外協力隊、日本国政府が派遣するボランティアになります。2年間ケニアで活動をしていました。現在は日本アンチ・ドーピング機構というところで、

いわゆるサラリーマンをしながら、A-GOALの活動を2つのキャップをかぶって行っています。

では、皆さんと同じ大学時代、どんなことをしていたか紹介させていただくと、こんな国に行っていました。大学時代に2回行った国ですが、どこがわかりますか。分かる人がいたらすごいなと思います。バヌアツという南太平洋の島国ですね。実は今日の司会の小林先生が元々バヌアツでJICA海外協力隊のサッカー隊員として活動していた経緯で、私自身も大学時代にこのバヌアツという、なかなか聞き慣れない国に行ってきました。

バヌアツでは、世界中から集まった人たちと、学校を建てたりするボランティアに参加しましたが、その中でサッカーを通して現地の人たちと仲良くなったということが私が途上国での活動を始める原点としてあります。ここでスポーツを通して、文化とか言葉も違う人たちと交流ができるなということを感じました。

そんなところで大学卒業して、民間企業に入り1回辞めて、JICA海外協力隊に参加したのですけれども、そこで行ったのがこの写真の場所ですね。ケニアのマリンディ児童保護措置所というところになります(図3)。



図1 バヌアツのサッカー風景



図2 南太平洋の島国 (バヌアツ)

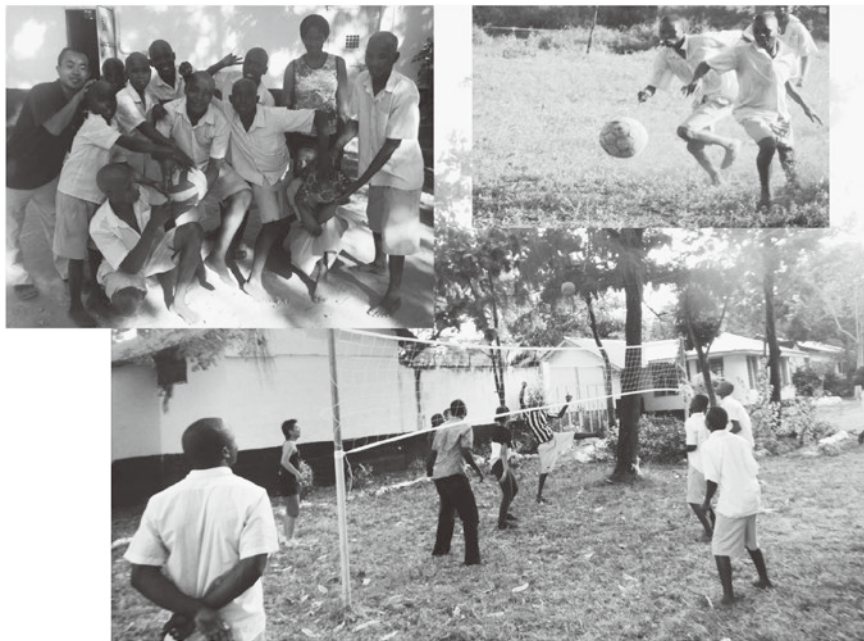


図3 マリンディ児童保護拘置所 (ケニア)

マリンディというのはケニアの中でも海沿いの街で、そこにある児童保護拘置所です。ここは10歳から18歳の、男の子から女の子までが収容されている施設で、ここにいる子どもたちは何らかの理由で警察に捕まったり、保護された子どもたちになります。彼らは、この施設に入りながら裁判所に通い、裁判の結果によって少年院に行ったり、家に戻されたりという形で次の行き場所が決まります。

施設でもスポーツを使った活動をしていました。どんな子がいたか紹介させていただきますと、例えばA君のケースですと、彼は4兄弟の長男で、かなり貧しい家庭で生まれました。一番上のお兄ちゃんということで、弟たちの面倒もみなくてはいけないのですが、家が貧しく、なかなか毎日食べらる状況でないということもあり、窃盗をしてしまいました。その時に、補導されてこの施設にやってきたという子になります。彼と初めて会った時、なかなか呂律がまわらないような状況がありまして、というのは、彼にはドラッグの使用歴がありました。ドラッグといっても日本でいう木工用ボンドみたいなものを吸って空腹をを和らげている子どもが貧困地域には多くいます。学校もなかなか行けず、15歳でしたが、小学校1年生ぐらいの学力でした。このA君に関しては、裁判所に通って、家も貧しいし、家に戻ったところで多分状況は変わらないのですが、彼の場合は、裁判の結果で少年院ではなく、改めて家に戻されるというような判決が出ました。ただ、やはり家に戻っても貧しさは変わらないので、改めて窃盗してしまい、この施設に戻ってくる、というような、児童鑑別所のリピーターのような子でした。結構こういった子が中にはいまして、私自身もこの施設で働きながら、この施設の中だけで、子どもたちの環境を改善したりとか、社会を変えることはなかなかできないと考えていました。

図4は現地の新聞に載っていたものですが、日本政府とか先進国も途上国に対して、お金を送ったりとか、技術を提供したりとかいろいろな開発援助をしています。支援がガバメント、政府に入ってもそこがミニスターとかチェアマンとか、いわゆる地方に行ったりとか、一般の市民に落ちてくる時には本当に雀の涙ほどになってしまうといったところがあります。私が出会ってきた子たちもなかなか政府からの支援も受けられないような家庭の子どもが多かったと思います。そんな中で、どうしたら地域の中でそういった子どもたちのサポートができるかと考えて、いろいろな人に話を聞いたりしている中で出会ったのが「地域のサッカークラブ」という存在になります。

これはどこか特定のクラブというよりも、ケニアの中にはそういったサッカークラブがたくさんありまして、現地のサッカークラブが子どもたちの居場所を作っている、というのがありました。図5の写真のように、本当にたくさん子どもたちが、中には学校に行っていない子どももいますが、放課後に集まってきてサッカーを教えるというような活動をしています。

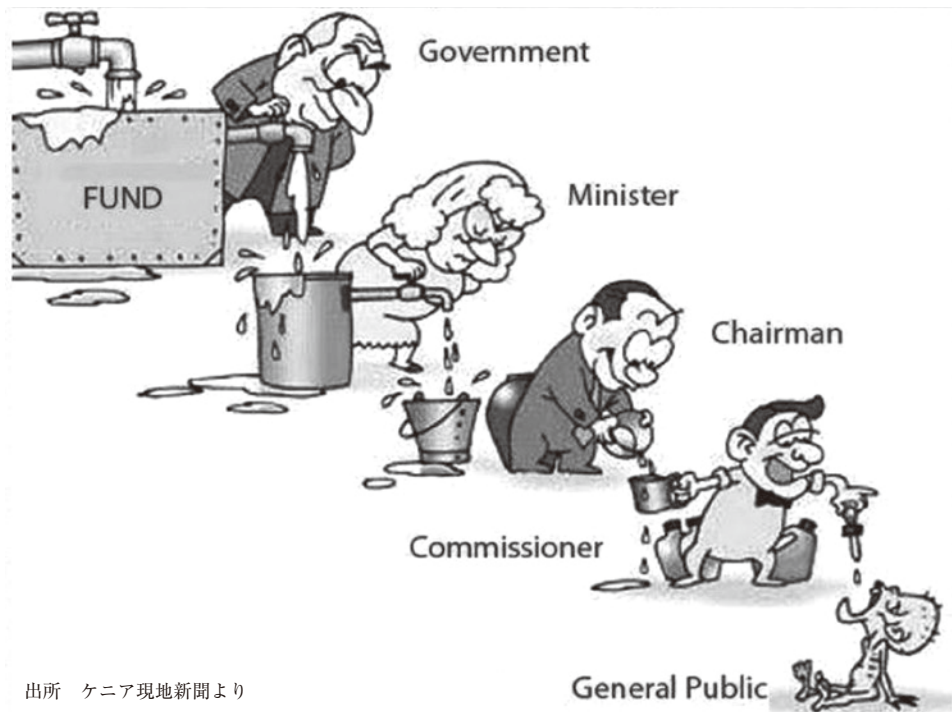


図4 開発援助の実態

地域サッカークラブ

地域住民たちが
地域の課題解決に取り組む



図5 地域サッカークラブとの出会い

サッカークラブの指導者たちも、安定した仕事をしているわけではなくて、日雇いの仕事をしたり、日銭を稼ぎながら生活をしているような人たちが多いのですが、自分自身大変な中でなぜ子どもたちを集めて活動しているのか聞くと、「Keep Busy (キープビジー)」という言葉が返ってきます。

Keep Busyというのは、「忙しくしておく」ということですが、子どもたちが、暇にしていると地域の中でドラッグに走ったり犯罪に巻き込まれたり、あるいは町で襲われてレイプされて、早期妊娠をしてしまったりとか、いろいろなケースがおきると。ただ、こういったサッカークラブに活動の場を作っておくことによって、彼らの問題を防ぐことができるという理由で運営しているのが、こういったサッカークラブでした。

こんな右側のような女の子たちもいたりとか、左上の写真見ると、裸足や裸足に近い薄い靴でプレーしている子どももいます(図6)。

右上は日本から届けたボールですが、こういった質の高いボールもすぐに手に入るものでもないで、一度壊れても縫い合わせて何度も何度も使っています。こういった技術も日本だと



図6 サッカークラブの様子

地域サッカークラブの活動

地域の社会課題を解決するための活動を日常的に実施



図7 地域サッカークラブの活動

今はなかなかないかなと思います。

このようなことをしながら、本当に貧しい中で運営しているのがサッカークラブです。右の写真は、女の子たちがゴミを集めてる写真ですが、単なるスポーツ、サッカーを教えるだけではなくて、地域の課題を解決するための活動を彼らは幅広くやっています（図7）。

例えば、先ほど Keep Busy と話しましたが、子どもの居場所を作るということも1つです。サッカーを教えるということももちろんあります。清掃活動というところをいくと、日本だとゴミ収集場所にゴミを持っていけば、収集車がきて片付けてくれますが、ケニアの特にスラムでは、そういった社会のシステムも整っていないので、本当に街中にゴミが落ち放題という状況があります。そんな中でサッカークラブの子たちが試合前にゴミを集めたり清掃活動をしていました。

あとはドラッグや犯罪の防止のワークショップ。これもサッカーの指導者が自分で教えるケースもありますし、そういった活動をしている NGO と連携して教えることもあります。今回の講演会では、「スポーツの力」が1つテーマではありますが、こういったスポーツクラブには子どもたちを集める力があるので、NGO からしても、エイズの啓発活動など行う時にスポーツクラブと組むことによって、ダイレクトに子どもたちに教えることができるというメリットがあります。学校に行けない子どもたちに教育の機会を提供するというのもしています。

ここで私のエピソードを1つご紹介させていただきます。私が協力隊時代に現地のサッカークラブと連携して、1,000人ぐらいの子どもや保護者を集めて、サッカーをしつつ環境教育だったり、保健のテーマで、例えば、環境をテーマにしたポスターコンテストを一緒に行ったり、子どもたちと健康の大切さを伝えるような歌を一緒に作ったりというようなイベントを開催しました。

1,000人ぐらいの地域の人たちを集めて行ったのですけれども、ケニアでは、終日のイベントはお昼を出さないと子どもたちも保護者もなかなか参加してくれないので、彼らにお昼を提供しようということで、その予算をスポンサーを募って、それこそ、今でいうクラウドファンディングのようなことをして集めて、それをサッカークラブの指導者を通して地域のレストランに頼んで、お昼になったら1,000人分のお昼を持ってきてもらうという形で手配していました。

1,000人分の食券を参加者に配っていたのですが、いざお昼時間になってみたら、レストランから届いたのは500人前の料理だけ。1,000人前頼んでいたのに500人前しか届かなかったという事件がありました。

「なんで届かないんだ」ということで、仲介してくれてたサッカークラブの指導者に確認しようとしたところ、彼はもうその時には会場におらず、電話をしても繋がらないというような状況でした。いわゆる私の集めていた運営資金は持ち逃げされたということですね。

実はこの時の仲介してたサッカークラブの指導者の写真が、2週間後ぐらいに地域にバーッと貼られまして、何かというと、実は選挙ポスターなんですね。名前は伏せておきますが、私たちのイベントの資金が彼らの選挙資金に消えてしまったんだなという出来事がありました。

アフリカで活動しているとこんなアクシデントもあり、信用できない人もいますが、そうではない人たちが大多数で。子どもたちのためを思って活動している人たちが本当にたくさんいます。そんな人たちと私も協力隊時代一緒に活動していましたし、協力隊の活動が終わってからも、一緒に活動したいなと思っていました。というのが私とアフリカのスポーツとの出会いです。

では続いて、A-GOALの緊急支援活動について話をさせていただきます。

去年ですね、日本でもコロナで皆さん大変だったんじゃないかなと思いますが、ケニアも非常に大変な状況でした。

国際線が止まって、JICAのボランティアも全員日本に帰ってきたり、他のNGOも引き上げたりとか。現地でも夜間外出禁止で、夜もやっていたレストランは閉めさせられたりとか。多くの人がコロナの影響を受けている状況がありました。

そんな時に現地と一緒に活動していたカディリという指導者から私宛にきたのが、このメッ

セージです。Facebook メッセンジャーできたのですけれども、「感染症では死なないと思うけれど飢餓で死ぬかもしれない」というようなメッセージでした。かなり衝撃的なメッセージですね。どういうことかと言うと、感染拡大してロックダウンという状況になりました。日本と同じようにケニアでも、特に会社勤めの人などは、家で在宅勤務をするというような状況もあったのですが、特にそういった会社などにも勤めてない日雇いの仕事をしてる人や、会社に勤めてる人の家でお手伝いさん、ベビーシッターとして働いてるような人たちが、このコロナの中で人と接触を避けるために、夜間外出禁止とかいろいろな影響を受けて、仕事ができない状況になってしまいました。そうすると、彼らは日常的にその日に稼いだお金で次の日のご飯を食べるような状況だったので、仕事がなくなり、即食料不足というような、次の日に食べるものもない状況になります。政府からのサポートもあるにはあっても、なかなか底辺の人たちにまで行き渡らない状況があって、それが先程の「感染症では死なないと思うけども、飢餓で死ぬかもしれない」というメッセージに繋がってきます。

このメッセージを受けて、私も何をしようと考えて活動を開始しました。現地の人のインタビューがあるので聞いていただければと思います。

(<https://www.youtube.com/watch?v=OdWugrWPRUU>)



彼女はお店を経営していたけれども、客が来なくなって、食べるものにも困ってました。本当にこういった状況の人たちが地域の中ですごく増えているというようなSOSがカディリカ



図8 コロナ禍の状況



図9 A-GOALの活動

らあったのが2020年5月ですね。では、どうしたらいいかということで、私自身考えて、彼らをなんとかサポートしたいなっていうことで始めたのが「A-GOALプロジェクト」です。

どのような形でA-GOALプロジェクトをやっているかといいますと、日本とか世界中から寄付を集めて、それをアフリカの地域スポーツクラブに送って、そこから地域の中で困っている住民たちに、食料や、感染症予防のマスク・石鹸などを届けるという形で行いました。

例えばカディリが代表を務めているクラブだと、図7でお話したような活動をしているので、このコロナで困ってる人たちをサポートしたいと考えた時に、地域住民のハブになれる要素がたくさんあると考えました。地域の人からの厚い信頼であったり、地域の中でサッカーを教えるだけではない活動をしているので、いろいろな人たちとのネットワークがあったりとか、誰が困っているかとか、どういったものが今必要なんだっていうニーズを把握していたりとか。地域のサッカークラブを通したら、困っている人たちに支援が届けられるのではないかとということで、A-GOALプロジェクトを5月に始めました。

図11の左にいるのが現地のサッカークラブの人たちですね。右の人たちが住民たちになります。どんな形でやっているのか、動画があるのでご覧ください。

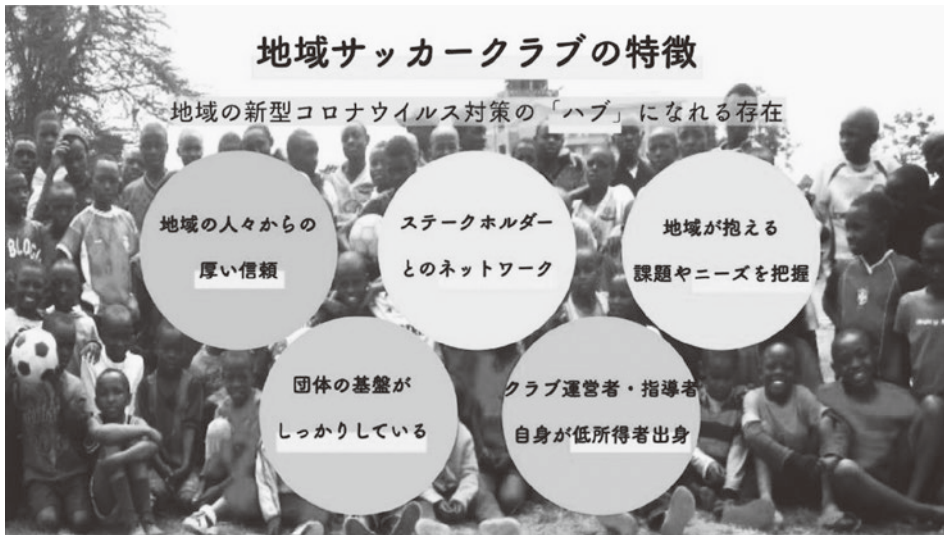


図10 支援のハブとなる理由



図11 ケニアの首都ナイロビにて

(<https://www.youtube.com/watch?v=OdWugrWPRUU>)



この映像は活動を始めてから1ヶ月半が経った時の様子です。彼らが地元で必要なものを買
い、それをパッキングして、住民に届ける。住民からはサインをもらう。先程、イベントでの運

支援実施方法：地域住民に確実に支援を届けるために



図12 支援実施方法

プロジェクトの進行方法

- ・オンラインコミュニケーションツールを活用 (Zoom, Facebookメッセンジャー)
- ・メンバーの大半は日本にいるため、遠隔にて支援先決定のインタビューやミーティング、モニタリングを行う。

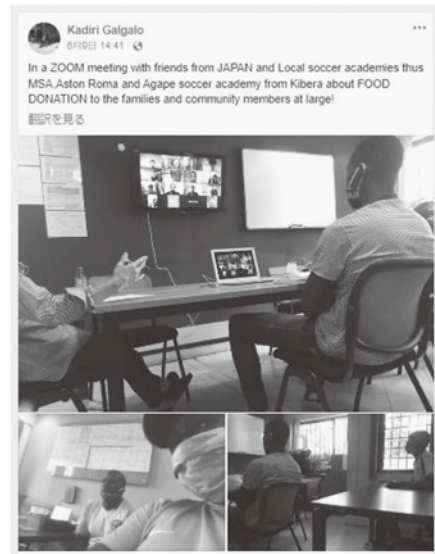


図13 オンラインの活用

営資金持ち逃げ事件についてご紹介しましたが、そういったことが起きる心配もあるので、現地の人からは、必ず届けたらその写真だったり、サインをもらう形にして、できるだけ日本とケニアで離れていながらもモニタリングができるような体制を組んで実施しています。現地にいる日本人にも協力してもらったりもしていますが、基本的にこのA-GOALプロジェクト、50人ぐらいの方に協力をいただいています。日本からも現地のサポートができるような体制を作って、運営しています。オンラインでのコミュニケーションツールを基本としながら、図13にあるような現地のスポーツクラブの指導者たちとズームミーティングをして、誰が困っているのか、どういったものが必要なのか、新たなクラブと連携する時はその人が本当に信用できるような人なのか、というところを、インタビューしています。まさに今回のテーマの「スポーツ×SDGs」の現在」ではないですけれども、時流に合わせてオンラインコミュニケーションツールを活用して実施しています。

現地住民からの声を紹介させていただきます（表1）。

例えば、一番上は高齢女性ですけれども、政府から見捨てられ、食べるものがなく、お腹を空かせていた、というようなケースもあります。高齢者になってくると、なかなかIT機器も使

表1 受益者の声

現地住民からの声

■グラウンドの近くに住む高齢女性

一人暮らし・情報入手が困難・生活に困窮

「政府からも見捨てられ、食べるものもなく、お腹を空かせていた。本当にありがとう」

■高校に通う女の子

「学校が再開してからも生理用品を買えず、学校に行けなかった。A-GOALからの支援により学校にも通えるようになって嬉しい。」

■クラブ代表者

今回はA-GOALの寄付から15世帯、コミュニティの寄付により35世帯分、合計50世帯の生理用品を支援することができた。それ以外にも地域の人から手洗い用のタンクや椅子を借りることができた。このプロジェクトを通してコミュニティの一体感が増した。

■クラブ代表者

受益者が今回の活動について、いい評判を広めてくれていて、クラブの評価も上がっている。今までは子どもをクラブの練習に参加させることを許さなかったが、コロナが落ち着いたら、参加させると約束してくれた家庭もある。

えなかったりして、政府が食料を配布しますよ、と言ってもその情報が手に入らなかったりする中で、A-GOALではスポーツクラブの人たちが食料を家まで届けています。2つ目は、去年は、ケニアで学校がずっと休校していたのですけれども、冬くらいですね、学校が再開してからも、生理用品が買えず学校に行けなかったというケースがありました。我々としては生理用品の配布も実施しました。あとはクラブ代表者からA-GOALの寄付から15世帯、合わせてコミュニティからも寄付が集まって、このプロジェクトを通してコミュニティの一体感が増したと、いわゆる日本が支援者、現地が被支援者だけではなくて、元々クラブと地域住民が助け合って活動していたというところがあったので、我々としては、あくまで現地のサッカークラブの後ろ支えというか、彼らを側面的にサポートすることによってコミュニティの一体感が増したという効果もありました。

現地でも、やはり女の子は家の手伝いして、サッカークラブに行くのは、あまりよく思っていない保護者中中にはいるのですけれども、こういった活動をすることによって、クラブの練習に参加させることを約束してくれたというようなケースもあります。

図14は各国での食料支援の様子です。左下はナイジェリア、右下はマラウイという国になりますが、ケニアと同じような形で現地のスポーツクラブをハブに食料支援を行っています。ア



図14 各国での支援活動

フリカで困っているのはケニアだけでもなかったもので、それぞれの国で、現地のハブとなるクラブを見つけて、食料支援や生理用品の支援などを実施してきました。2020年5月から2021年9月までで12,997人の人たちに支援ができました。

右下のマラウイでは、食料をただ配るだけだと、持続的な活動にはならないので、食料を渡すかわりにサッカークラブに野菜の種を渡して、彼らが野菜を育て、収穫した野菜を住民に渡し、またそこから新たな種がとれるので、次の野菜を育てるといような持続性を考えた活動を実施しています。このようにA-GOALの活動は各国で広がってきています。

私が一方的にお話しする時間はこれぐらいにしたいと思います。ここからはケニアのカディリも交えて話したいと思いますが、カディリが準備中のため、一旦小林先生にお返しします。
○小林先生 岸さんからご説明ありましたように、通信状況も先進国に比べると、脆弱というのは否めない。ただ、そうは言いますが、前回ちょっと打ち合わせでカディリと岸さんと僕とで話した時に、クリアにズームで繋がることもあるんですね。なので、先程スライドでもありましたが、「アフリカ＝発展していない」とかね、「アフリカ＝遅れている」といった非常にステレオタイプは描きやすいんですが、実は途上国はそんな単純ではなくて、途上国の特徴を言った時に都市部とそうではないいわゆる地方部、都市部以外の格差がものすごいですね。ケニアについて言っても、ナイロビに行けば、超高層までいかないにしても高層ビル群はあり



支援国：5カ国（ケニア・ナイジェリア・マラウイほか）

地域スポーツクラブ：22

支援世帯数：2,632世帯

支援人数：12,997人

(2021/9/25 現在)

図15 A-GOALの支援実績

ますし、ケニアだからサバンナを思い浮かべて、そこに野生のキリンやゾウがいる、もちろんそういう空間もたくさんあるのですが、しかしながら、そればかりではないと。なので途上国って割と単純化して一元化して捉えられやすいのですが、非常に複層的であり、国内での格差が著しく、先進国以上に大きいなというのも特徴です。

〈ケニアとの交流（割愛）〉

ではせわしないですが、ケニアの状況としてはこんなところかなと思います。時間も終わりに近づいているので、少し私から、まとめのお話をさせていただければと思います。画面共有しますね。最後、皆さんにお伝えしたいのは1つだけなんですけど、A-GOALがなぜこのような活動をして、これだけの人たちと繋がって、活動しているかという。A-GOALで目指しているのは「スポーツでアフリカと日本を繋いで、助け合いの関係性を築く」ということです。

いま日本とケニアをオンラインで繋ぎましたが、別にどちらが支援して、どちらが受益者というわけでもなくて、お互いに困った時には助け合える関係を、スポーツだと作ることができ



食料支援 (2020.5～)



感染予防・啓発活動 (2020.6～)



農業支援 (2020.7～)



交流イベント (2020.8～)



女性支援 (2020.11～)



プロジェクトサポート (養鶏事業など)
(2021.4～)



Jリーグクラブとの連携
(2021.6～)



スポーツSDGs調査
(2021.10～)



スポーツイベント開催支援
(2021.11～)

図16 活動の広がり

るということ、少しでも今日参加していただいた皆さんに感じていただけたらいいなと思っています。それがおそらく、SDGsの達成にも繋がるかと思いますが、そういったスポーツの力があるということ、皆さんに少しでも感じていただければありがたいなと思います。機会があればもう少しいろいろな他の活動も紹介できたらと思いますが、今日は時間の関係もありますのでこれぐらいにしたいと思います。

演者プロフィール

岸 卓巨 氏

〔経歴〕

- ・中央大学 法学部 国際企業関係法学科 卒業
- ・FLP スポーツ・健康科学プログラム
小林勉ゼミ「スポーツを通じた地域活性化」
- ・新卒で民間企業就職
- ・中央大学大学院 総合政策研究科（研究テーマ「スポーツを通じた国際協力」）
- ・JICA 青年海外協力隊（ケニア・児童鑑別所勤務）
- ・Sport for Tomorrow コンソーシアム事務局

〔現在〕

- ・公益財団法人日本アンチ・ドーピング機構（JADA）職員
- ・一般社団法人 A-GOAL 代表理事
- ・一般社団法人アフリカクエスト理事
- ・特定非営利活動法人サロン2002理事

〔著作〕

- 現代スポーツ評論31『スポーツを通じた国際貢献のいま』（2014）創文企画 共著
スポーツSDGs概論（2020）学術研究出版 共著





TAKUMI KISHI

岸卓巨

一般社団法人A-GOAL代表

新型コロナの影響により生活に困窮するアフリカの人々への緊急支援活動を目的として「A-GOALプロジェクト (Africa GLObal Assist for Local club)」が設立された。これまでケニア・ナイジェリア・マラウイなどアフリカ各国で現地の地域スポーツクラブと連携し、10000人以上の人々に食料や衛生用品を届けてきている。

今回の講演では、アフリカともオンラインでつなぎ、現地の様子等を紹介しながら、このプロジェクトの現在の状況について情報提供してもらうことで、このところ語られ始めたスポーツSDGsとは何かについて、プログラム履修者らと一緒に考察を深めていく。

スポーツの力で誰1人残さない

「スポーツ×SDGs」の現在

2021年

12月11日(土)

▶15:00~16:30

●参加申し込み期限：12月7日(火)

●会場

オンラインアプリZoomを使用

●参加申込

右記のQRコードを読み取り
お申し込みください

2021 FLPスポーツ健康科学プログラム期末報告会 オンライン講演会 (中央大学保健体育研究所・共催)